

Guarda l'est, ragazzo! Orientalism and the New Jerusalem in Venetian Art during the Late-15th and Early-16th Centuries

Noriko Kotani

青年よ、東方を見るべし！ 15世紀末から16世紀初めにかけてのヴェネツィア芸術における東洋的要素と新エルサレムに関する考察

小 谷 訓 子

ヴェネツィアをテーマにした三つの研究書、P・F・ブラウン著、*Venetian Narrative Painting in the Age of Carpaccio* (1988)；J・レイビー著、*Venice, Dürer and the Oriental Mode* (1982)；D・ハワード著、*Venice and the East: the Impact of the Islamic World on Venetian Architecture* (2000) は、ルネサンス期のヴェネツィア芸術に見られる東洋的な要素についてそれぞれの議論を展開する。今回の拙論は、主として上記の三著作に触発されたことに始まる。ブラウンは、15世紀後半から16世紀初めにかけてのヴェネツィア絵画に見られる東洋風の衣服やターバンなどを指し、これらを東方とヴェネツィアとの交流関係を記録する芸術的証拠だと述べた。同じくハワードもミフラーブ窓 (mihrab window)、オジー・アーチ (ogee arch)、突き出したバルコニーなどを東洋的要素であると指摘し、ヴェネツィアと東洋との緊密な関係を語った。そして、近年の研究では、これらの芸術に見られる東洋的な

要素は、ヴェネツィアのアイデンティティが聖地エルサレムと結びついていることを示すと論じられている。つまり、エルサレムは東方の象徴であり、且つ精神的、文化的、商業的な利益の源であって、ヴェネツィアはそのエルサレムと深く繋がる、という考え方である。実は、エルサレムとの関係性は何もヴェネツィアに特化して説かれたわけではない。ルネサンス期に限れば、フィレンツェやローマでも同様の考え方が流布し、それぞれに東洋的な要素を用いてその表現を行った。拙論では、先ず上記の三著作を礎に、ルネサンス期のヴェネツィア芸術に見られる東洋的要素の分析と解釈を行い、次いで「エルサレムとの関係性」或いは「新エルサレム」という概念が具体的にどのようにヴェネツィアで体现されたのかという問題を、フィレンツェとローマのケースと比較しながら考察する。